説話の生態の一例
――更級日記に見る――

上野英二

一

上総介の任果てて、帰京する父に従った菅原孝標女は、旅の途上、武蔵国竹芝で、土地に伝わる話を耳にした。その話は、よほど幼な心に印象を刻んだらしく、孝標女はその一部始終を『更級日記』に長々と記し留めている。

今は武蔵の国になりぬ。ことにをかしき所も見えず。浜も砂子白くなどもなく、こひぢのやうにて、紫生ふと聞く野も、蘆荻のみ高く生ひて、馬に乗りて弓持たる末見えぬまで高く生ひ繁りて、中を分け行くに、竹芝といふ寺あり。はるかにはゝさうなどいふ所の廊の跡の礎などあり。「いかなる所ぞ」と問へば、「これはいにしへ、竹芝といふさかなり。国の人のありけるを、火焼屋の火焼く衛士にさし奉りたりけるに、御前の

庭を掃くとて、「などや苦しきめを見るらむ。我が国に七つ三つ造り据ゑたる酒壺に、さし渡したる直柄の瓢の、南風吹けば北になびき、北風吹けば南になびき、西吹けば東になびき、東吹けば西になびくを見て、かくてあるよ」とひとりごちつぶやきけるを、その時、帝の御娘、いみじうかしづかれ給ふ、たゞ一人御簾の際に立ち出で給ひて、柱に寄りかゝりて御覧ずるに、このをのこの、かくひとりごつを、いとあはれに、いかなる瓢のいかになびくならむと、いみじうゆかしく思されければ、御簾を押し上げて、「あのをのこ、こち寄れ」と召しければ、かしこまりて高欄のつらに参りたりければ、「言ひつること、いま一返り我に言ひて聞かせよ」と仰せられければ、酒壺のことをいま一返り申しければ、「我率て行きて見せよ。さ言ふやうあり」と仰せられければ、かしこく恐ろしと思ひけれど、さるべきにやありけむ、負ひ奉りて下るに、論無く人追ひて来らむと思ひて、その夜、瀬田の橋のもとにこの宮を据ゑ奉りて、瀬田の橋を一間ばかり毀ちて、それを飛び越えてこの宮を舁き負ひ奉りて、七日七夜といふに、武蔵の国に行き着きにけり。帝、后、皇女失せ給ひぬと思しまどひ求め給ふに、「武蔵の国の衛士のをのこなむ、いと香ばしき物を首にひきかけて、飛ぶやうに逃げゝる」と申し出でゝ、このをのこを尋ぬるに、無かりけり。論無くもとの国にこそ行くらめと、おほやけより使ひ下りて追ふに、瀬田の橋こぼれて、え行きやらず。三月といふに、武蔵の国に行き着きて、このをのこを尋ぬるに、この皇女、おほやけ使ひを召して、「我さるべきにやありけむ、このをのこの家ゆかしくて、率て行けと言ひしかば率て来たり。いみじくこゝありよく覚ゆ。このをのこ罪し凌ぜられば、我はいかであれと。これも前の世に、この国に跡を垂るべき宿世こそありけめ。早帰りておほやけにこのよし奏せよ」と仰せられければ、言はむかたなくて、登りて帝に、「かくなむありつる」と奏しければ、

言ふかひなし、そのをのこを罪しても、今はこの宮を取返し都に帰し奉るべきにもあらず。竹芝のをのこに、生けらむ世の限り武蔵の国を預け取らせて、公事もなさせじ、たゞ宮にその国を預け奉らせ給ふよしの宣旨下りにければ、この家を内裏の如く造りて住ませ奉りける家を、宮など失せ給ひにければ、寺になしたるを、竹芝寺と言ふなり。その宮の産み給へる子どもは、やがて武蔵といふ姓を得てなむありける。それより後、火焼屋に女は居るなり」と語る。

「ひとたび、わが国に文字が伝来し、文字の文学が出現してから後については、もっぱら、その方ばかりを中心に文学の歴史を記述する習慣が、いつの間にかでき上ってしまった」なかで、この話は「一歩都を出はずれたところからは、口承の歌や語りごとだけの文字のない世界であった」ことを窺わせてくれる、貴重な資料でもあった。「ことを説話文学史に限定してみても、都の説話文学に対して、説話の方は、都と鄙とを問わず、そのひろがりを、当時の日本の社会と同じくしていた（益田勝実『説話文学と絵巻』）」。

「と問へば」「と語る」という枠組において記されたこの話は、確かに口承で語られたことが確実な、得がたい資料と見ることが出来る。

「都の説話文学」を考える上でも、これは好個の対照材料であった。例えば、この話は、

これはいにしへ、

と始まり、

内裏の如く造りて住ませ奉りける家を、宮など失せ給ひにければ、寺になしたるを竹芝寺と言ふなり。その

宮の産み給へる子どもは、やがて武蔵の姓を得てなむありける。それより後、火焼屋に女は居るなり」と語る。

と結ばれているが、それはそのまま、『今昔物語集』に収められてもよいような結構を示している。

今ハ昔、（中略）

其後モ、堂塔ヲ造リ、東西南北、谷ニ房舎ヲ造リ、若干ノ僧ヲ令住メテ、天台ノ法文ヲ学ビ、佛法盛ニシテ、霊験殊ニ、勝タリ。女ハ此山ニ登ル事无シ。延暦寺ト名タリ。天台宗、是ヨリ此朝ニ始マル。彼ノ宇佐ノ給ヘリシ小袖ノ脇ニ綻□タルニ、薬師佛ノ御削鱗付テ、于今根本ノ御経蔵ニ有リ。亦、大師ノ自筆ニ書給ヘル法華経、筥ニ入テ禅唐院ニ置奉レリ。代々ノ和尚、清浄ニシテ是ヲ礼シ奉ル。若シ、女ニ少モ触ヌル人ハ永ク是ヲ礼シ奉ル事无シトナム語リ伝ヘタルトヤ。

（巻第十一、伝教大師始建比叡山語第廿六）

「今ハ昔」「トナム語リ伝ヘタルトヤ」という首尾もさることながら、結文が備わり、話の内容と現在とのつながりが、幾重にも示される点など、『更級日記』の竹芝寺の話と『今昔物語集』の説話とは興味深い類似を見せている。

今ハ昔、（中略）

而ルニ、公ケ、「申スニ可随シ」ト被仰下ヌレ、直、思ノ如ク、郡ヲ立テ、堂ヲ造テ、其観音ノ、像ヲ安置シ奉ケリ。其ヨリ後今至ルマデ其ノ子孫相伝ヘツヽ、比ノ観音ヲ恭敬シ奉ル事不絶ズ。亦、其ノ国ノ越智ノ郡、比ヨリ始リケリトナム語伝ヘタルトヤ。

（巻第十六、伊予国越智直依観音助従震旦返来語第二）

しかし竹芝寺の話が、「と問へば」「と語る」という枠組で記され、「トナム語リ伝ヘタルトヤ」と、口承されたことを強調する『今昔物語集』の説話との類似を見せることは、とりも直さず、それが「口承の」「語りごと」そのままに書き留められた、ということを意味するであろうか。

益田勝実氏『説話文学と絵巻』は、『更級日記』の竹芝寺の話の背後に、武蔵宿祢家の歴史を探り、さらに「あくまでも衛士の課役からの逃亡という形で、その逃亡という抵抗がかえってこよない成功・致富をもたらす、というふうに伝承していく底には、自分自身衛士となっていかねばならなかった人々、民衆の心理がそこに息づいている。かれらは逃亡をも美しく語り上げ、その中に苦しい生活からの解放を空想する。氏族勃興の伝承を語る地方豪族の子孫たちだけでなく、その話を引き取って、武蔵の一角の地縁共同社会の伝承に仕上げていく、みずから衛士になって都に向わざるを得ない人々の説話形成への参加のあとが、ここに歴然としている」と論を進める。

しかし、『更級日記』に記された竹芝寺の話に、「伝承」の跡を見出し、さらにそこに「説話形成」の跡をたどることは、そう簡単ではない。

『今昔物語集』は各説話の冒頭を「今ハ昔」で始め、「トナム語リ伝ヘタルトヤ」で結ぶことを原則としている。それは、何らかの原典に依拠した書承の説話の場合も例外ではない。したがって、その結構をもって説話が、口承された形をそのままに留めたものであると言うことは出来ない。竹芝寺の話も同様、その首尾はどこまで「口承」の「語りごと」であったことを反映するものであろうか。物語好きの作者のことだから、すべてを彼女の創作だと疑ってみることさえ不可能ではない。

『更級日記』と言えども、すでに時代は平安期の半を越えている。遠国武蔵とは言え、寺院建立の地に書承の「説話文学」の影響がすでに及んでいなかったかどうか。あるいは筆録者の、つまりは孝標女の私意がそこに交っていなかったかどうか。『更級日記』に書き留められた竹芝寺の話から、実際に語り伝えられたであろう説話を復原することは意外に難しい。「もしも、過去のある時、ある場所で耳に聞えたところ、口に語られたところの現実の説話そのままを取扱ふことが不可能である故に、二次的に書承のものを対象とするといふのならば、それにはそれに応じた態度・方法が考へられなければなるまい（山田俊雄「説話文学の文体―総論―」『日本の説話　七　言葉と表現』所収）」。

しかし、益田氏によって考究の先鞭がつけられたように、この話の起源は古く遡るものであろうし、そこに口承の過程を想定することは、確かに不自然なことではない。ただし、それを扱うためには、かかる観点からの再検討が必要となろう。

この際、現在も行われているところの口承の説話と直接対比することも有効な方法かも知れない。

実際、民話と比較するならば、『更級日記』の竹芝寺の話にも民話の特徴と言えるものを拾うことが出来る。

関敬吾によれば、昔話は、「一定の構成原理にしたがって組立てられ、その表現形式にも定った法則がある（『民話』）。その一、「発端の形式」。竹芝寺の話の発端、「これはいにしへ、竹芝といふさかなり。国の人のありけるを」というのは、『民話』に分類するところの「聴き手の印象を強めるために、実在の人物、または現実の場所と結びつけた用法」に属するものであろう。

あるいは、「結末の形式」。「この家を内裏の如く造りて住ませ奉りける」、「その宮の産み給へる子どもは、や

がて武蔵といふ姓を得てなむありける」という結末は、「英語でいうハッピー・エンド」、「主人公が〈今がいままでよい暮しをしている〉ことを意味する言葉」、「〈一期さかえた〉〈孫子しげた〉〈一生安楽にくらした〉という形式」（『同書』）に対応するものであろう。「昔話の主たる内容は、若い主人公の生涯に関することであり、その成功を物語るものである。主人公の理想は婚姻の成就にあり富の充足にあった。婚姻の成就と富をうることによって、その一族の将来の繁栄もまた約束されるのである（『同書』）」。竹芝寺の話は、その内容においても昔話の特徴を備えたものであったと見てよい。

竹芝寺の話の結末は、さらに、「それより後、火焼屋に女は居るなり」と続くが、これも『民話』の説くところの、「動植物の発生の由来・習性・形態を説明言葉を結末とする形式」に当るものであろう。『民話』はこれに類するものとして、「三月・五月の節供の起源を説明した言葉を結末としたもの」を挙げているが、竹芝寺の話の末文も火焼屋に女が居ることの「起源を説明した言葉」として理解される。

『民話』はまた、昔話の特徴をその「叙述様式」についても指摘している。例えば、「昔話は、その大半は登場人物の対話の形で、事件は展開される。語り手は人物の背後にかくれ、〈爺が……といったげな。すると婆が答えたげな〉という形式で語られる」。まさにこれは、竹芝寺の話の叙述の特徴とも言うべきことで、情景の描写、心理の描写に筆が費されることの少ない『更級日記』にあって、確かにこの点は、竹芝寺の話に特に際立っている。

以上の諸点に照らすならば、竹芝寺の話は民話と同じような口承の伝承の要素を多く留めたものであったと、ひとまずは言い得るであろう。

中でも、「火焼屋」の「衛士のをのこ」がつぶやいたという独言には、口承の跡が色濃いと見ることが出来る。

我が国に
七つ三つ　造り据ゑたる　酒壺に
さし渡したる　直柄の瓢の
南風吹けば　北になびき
北風吹けば　南になびき
西吹けば　東になびき
東吹けば　西になびく
を見で　かくてあるよ

一読、韻律と言い、形式と言い、尋常の散文でないことが分るが、これは、「事件が高潮して来ると、しばしば韻文をもって語られる」、昔話の会話の特徴（『民話』）を留めたものではなかったろうか。関敬吾は、「田螺息子」のなかから、「つぶやつぶ、わがつま（夫）、ことしの春になったれば、ちょっくらもっくら、さされたか」などを例示している。

「衛士のをのこ」の独言に埋没してしまったかのようなこの一節に、何らかの韻律の痕跡を認めるならば、このことこそ、竹芝寺の話が、口承の伝承として孝標女の耳に届いたことの明証となるかも知れない。

「昔話のこうした韻文は、かつてはあるいは呪文であったものがあるかも知れない」と関敬吾は言う。「竹芝のをのこ」のつぶやきの背後にも、「呪文」に類する原形が「あるいは」「あるかもしれない」。

あまりの徒然に〳〵
門に瓢簞吊いて
折ふし風が吹いて来て
あなたへちゃきりひょ
こなたへちゃきりひょ
ひょ〳〵らひょ〳〵
瓢簞吊いて　面白やの

（和泉家古本『抜書二』）

きわめてよく似た歌謡が狂言に伝えられている。「竹芝のをのこ」のつぶやきを「かの竹芝の長者が酒甕の上に引掛つて、東吹けば西へ西風には東へ、ぶら〳〵と動いて居た」（柳田国男「史料としての伝説」）と解するならば、発想における類似は著しい。表面には現れてはいないけれども、「竹芝のをのこ」のつぶやきも、このように、吊した瓢簞のかなでる音に関心を払うものであったかも知れない。(1)

この例は、はるか後世室町時代のものだが、似たような歌謡は、時代を溯って、平安時代にも存在していたのではなかろうか。

瓢簞を素材にした歌謡ならば、古代にもその例を拾うことが出来る。

大原や　清和井の清水
杓もて

鶏は鳴くとも
遊ぶ瀬を汲め〳〵

本

豊竈　御遊びすらしも
久方の　天の河原に
瓠の声する〳〵

末

久方の　天の河原に
豊竈　御遊びすらしも
瓠の声する〳〵

（神楽歌・採物歌・杓）

直会御歌

折釧　五十鈴の宮に
御撰立つと
打つなる瓠は
宮もとゞろに

（神楽歌・竈殿遊歌）

儛歌

もゝしきの大宮人の

楽しみと
打つなる瓠は
宮もとゞろに

（『皇太神宮儀式帳』所収神楽歌）

『皇太神宮儀式帳』の歌は、「直会歌」に「儛歌」。酒宴の席の歌謡であり、何らかの舞を伴ったものであることが想像される。翻えって、「竹芝のをのこ」のものも、「酒壺に、さし渡したる直柄の瓢」を素材とする。これもあるいは、酒席で歌われるべき歌に由来したものであったかも知れない。(2)

狂言『瓢の神』では、酒は呑まないものの、瓢簞の歌が、所作を伴いながら面白く舞われる。

瓢簞ふくべに緒をつけて、折々風の吹くときは、へう〳〵らへうむ　（『古典文庫和泉流狂言集』）

いずれにしても、瓢簞を歌う歌は、リズムカルで解放感にあふれる。「竹芝のをのこ」のものも、内容的にはそれに類する。孝標女の聞き取りの問題、記憶の問題、叙述の問題、あるいは『更級日記』定家本の書写の問題などの、様々の問題はあるものの、「竹芝のをのこ」のつぶやきは、もと韻文として語られたものではなかったろうか。(3) だとすれば、これは竹芝寺の話がもと「口承」の「語りごと」であったことの、重要な痕跡であったことになる。

それ以外でも、例えば、「七つ三つ」、「七日七夜といふに」、「三日といふに」と、話の中で対比的に現れる、「七」「三」という数に関しても、昔話の特徴と見ることが出来る。「〈三〉は昔話で最も好まれる数の象徴である」し、「七」「もまたしばしば現われる（『民話』(4)）」。

このように、昔話にみられる特徴の多くが、『更級日記』竹芝寺の話にも見出されることからすれば、この話がもと「口承」の「語りごと」であり、孝標女の耳にも「語りごと」として届いたものであろうことは、大筋で認めてよいであろう。同時に、このことは、この話が、民話の特徴を備えた話の、きわめて古い筆録であったことをも意味する。「トナム語リ伝ヘタル」と、伝承を謳いながら、実際のところは必ずしもそうでなかった『今昔』の説話などよりは、その点において、これははるかに資料的価値の高い一次資料であったと言うことが出来よう。慎重な操作を怠らなければ、千年前の竹芝の人の肉声をここに聞くことも、あながち不可能ではないかも知れない。

二

そもそも、この話の内容自体が、民話の好んで語ったところであった。「貧しい民が貴人を妻とした為に長者に成つたと云ふ話は夙くから我邦に行はれて居たもので、更級日記の竹芝長者などは疑もなく同じ系統に属して居る（柳田国男「山島民譚集㈢」）。

柳田国男は、「遠く『更級日記』の著者が、武蔵の竹芝で採集してきた民譚とも、別種とはいはれない一致を認め」得る民話として、「諸国の山田白滝話」を挙げ、その一例として、「備中白石島の女たち」に伝わった「山田の露といふ口説節の盆踊り」の詞章の一部を『桃太郎の誕生』に引いた。

引用は昭和五年刊、『民俗芸術』第三巻第四号によったものだが、部分的な引用にとどまったので、今改めて

その全文をここに引く。

山田の露

縁(えん)は不思議なものにてござる
ちちはよこはぎ、とよなり公よ
姉はたいまの、中将姫よ
妹(いもと)しらたき、二八の姿
一のきさきに、そなはり給ふ

入節「縁ははなはだ限りなし
「ここにつのくに、山田の谷に
治右衛門とてかしこきをのこ
内裡しらすのやにとられつつ
塵をひろうて、つとめて居たが
みすの恋風、吹きまくりつつ
一のきさきの、しらたきさまの
つぼねまるねの、おん姿をば
ひとめ見るより、はや恋となり
今日かあすかの、病(やまひ)となりて

もはやつとめに、出でざりければ
あなたこなたへ、洩れきこえつつ
ついに内裡の、おん耳に入り
じひは上より、招し下さるる
汝恋する、そのこころざし
さてもやさしい、殊勝なものと
恋は日本(にっぽん)、天竺までも
たかき卑しき、へだては無いぞ
一首つらねよ、歌よもならば
のぞみ叶へて、得させんものと
「ぢきにぎかんのありがたや
そこでをのこと、しらたきさまの
両方(りょをは)たがひの智慧くらべにて
やがて一首の歌よみたまふ
すゑのおちくに、しらたきさまの
節「よませ給ふは、くもだにの
にごりかからぬこのしらたきを

送「心なかけな山田をのこと、あそばせければ
そこでをのこも、先づとりあへず
節「みなつきのいなばの露ともこがれつつ
山田へ落ちよ白瀧の水、とよみ上げければ
君をはじめて公家大臣(くげだいしん)も
さしもあつぱれおんめいかやと
上下さだめきおん褒の給ふ
ときに君よりお褒美(ほび)に
いとしさかりのしらたきさまを
治左(ちざ)が女房となをつけかくて
つれてかいれと召しくださる
家のたからは、かのうす墨に
まむりがたなは、むこ引出物
位授かる、おん巻物を
いまに不思議はわき出るつゆの
いまの世までも山田のとのと
なんぼめでたい、わか松のよサー

「結局は和歌の応酬によつて貴人を感ぜしめまつり、姫を宿の妻に賜はつて故郷に還り、子孫繁昌したといふ一条の物語である」。その骨子は「和歌の応酬」という点を除けば竹芝寺の話にほぼ一致する。「和歌の応酬」の点に関しても、「竹芝のをのこ」の「直柄の瓢」のつぶやきを、その変形と考えるならば、両者は完全と言ってよいほどの類似を見せるのである。『更級日記』に筆録されたところの竹芝寺の話は、「諸国の山田白滝話」にも連なる話の、はるかに古い姿を留めたものと見ることが出来る。

しかし、だからと言って、この話を以ってそのまま、古代における民話のあり方を知る資料とすることは、必ずしも妥当ではない。なぜなら、この話に民話に共通する様々の特徴が認められる一方で、この話が、菅原孝標女という個人によって書き記されたものであるということも考慮されねばならないからである。

例えば、文中に目立つ同一の表現の繰り返し（傍線参照）。このような繰り返しは、一見口頭の語りの特徴を留めたもののように見える。関敬吾は、「昔話に固有な表現方法」として、「語り手はまた聴き手をあきさせないために、新しい言葉を作り出し、あるいは刺戟的な言葉を作る代りに、同じ言葉をくり返して使う」ことを挙げている（『民話』）。身近な例で言えば、昔話『桃太郎』における、桃太郎と犬・猿・雉との出会いごとに繰り返される会話などがその典型であろう。「こうした叙述が幼少の児童や単純な教養しかない聴き手には十分な感動を与えたものであろう」（同書）。

けれども、『更級日記』の竹芝寺の話に関する限り、これらの繰り返しは、民話などに見られるそれとは、様

相を異にしたものだと言わねばならない。

例えば、文中二例の「論無く」。いずれも確実性の高い推測を示すものとして用いられたものだが、これらは民話の繰り返しほどには、単純なものではない。民話における繰り返しは、同一のプロットの、同一の状況で単純に繰り返されることが多い。民話では、繰り返されることによってその印象が深まり聞手の感興が刺激される。けれども『更級日記』の「論無く」はそうではない。一方は逃亡する「竹芝のをのこ」の推測、一方は追跡する「使ひ」の推測。言語使用者も逆なら、場面も違う。しかも繰り返されるのは、物語の展開上重要な内容というわけではなく、いわゆる陳述副詞に過ぎない。

これは、聞手の印象を強くするための働きかけとして繰り返された、口承の語りの痕跡と見るべきものではなく、むしろ筆録した孝標女の固有の特徴と見るべきものではなかろうか。あえて言えば、この二つの繰り返しによって強調されているのは、この話全体が、論理的必然への二つの推測によって大きく展開しているということ、およびその切迫感であろうか。それは最早、「幼少の児童や単純な教養しかない聴き手」を相手にした、民話のものではない。

あるいは、二例の「さるべきにやありけむ」。これも単なる繰り返しではない。やはり一種の副詞的挿入句であり、しかもその言語使用者を異にしている。やはりこれらも、筆録者、孝標女の関心を示した繰り返しであると理解すべきものであろう。二つの「論無く」と同じように、孝標女は、この話が、重要なところで運命によって動かされていることを意識していたのではなかろうか。全同の表現ではないけれども、「これも前の世に、この国に跡を垂るべき宿世こそありけめ」という同内容の繰り返しが、この話にもう一箇所現れることからすれば、

孝標女は、「宿世」という原理を原動力として展開する話として、竹芝寺の話を理解していたものと推測される。竹芝寺の話は、語られた通りに『更級日記』に記されたわけではなかったと考えるべきであろう。孝標女がこの話を聞いたのが、十三歳。日記の執筆は恐らく晩年のことと考えられるから、その間の歳月が、すでにこの話に何らかの変容をもたらしていたであろうことは、容易に想像がつく。同時に、その執筆に当っても、筆録者の主観に基づいた、整理、統一が施されたであろうことも、当然考えられなければならない。

そもそも、竹芝寺の話を記す『更級日記』の文章は、民話の「叙述様式」とは根本的な点で異なっていた。「昔話の文章構造は散文であるが、叙述はすべて〈あったそうな〉〈草取りにいったという〉〈帰って来たと〉というような、間接叙法をもちい」、「登場人物に対する言葉と、聴き手に対する言葉とがつねに交叉して語られる」。「九州の《猿と蟹》の中には〈猿どんがおらいたげなもんね〉という叙述がある。ねは聴き手に対する呼びかけである」（『民話』）。

「つねに聴き手と語り手と主人公の相互関係において、昔話は語られる」。民話の「叙述様式」は常に「聴き手」を意識したものになっている。その叙述には、「そうな」「という」「と」、あるいは「ね」「の」「さ」など、「聴き手」を意識した文末詞が多く用いられる。したがって、その文章は、適宜切断され、あまり長大に及ぶことはない。しかるに、『更級日記』の竹芝寺の話は、わずか七文で成り、しかもその殆どは接続助詞で継いだ長大なる二文を以って綴られている。これは民話の文章としては、余りに長文に過ぎるのではないか。助動詞「けり」が用いられ、「なむ」による係結びが見られるにせよ、これでは「聴き手」を意識した「叙述様式」とは言い難い。

「口頭言語は、きびしい伝承の掟でも課さない限り、息の長い緊張に耐え得ないのが一般である」（渡辺実『平

安朝文章史』)。民話も、比較的短い文で語られることが普通である。しかるに、『更級日記』の場合、それとはまったく対照的な長文で、話は綴られている。

『平安朝文章史』の比喩を借りるなら、それは、「出来事の一部をなす一こま一こまを、独立した一こま一こまとして描く」書き方に対して、「出来事の終点にカメラを固定して望遠レンズを用いて起点までを見通し、継起する出来事を切れ目のないロングカットにおさめるような書き方である」と言うことが出来よう。すでにそこには、出来事を特定の視点から整理して叙述しようという、独自の姿勢があったことが窺われる。

やはり『更級日記』の竹芝寺の話は、決して民話をそのままに筆録したものではなかったと言わねばならない。これは、民話の「聴き手」が書き手の立場に回って書き綴ったものなのである。『更級日記』の竹芝寺の話は、口頭で語られたことが確実であり、かつそれが特定の個人によって書き留められたことが明確である点において、珍重されるべき資料であったと言うべきであろう。

三

上京の旅も進み、いよいよ都近くなると、東海道は瀬田川を渡る。『更級日記』は、その間のことに、一言筆を及ぼしている。

瀬田の橋みな崩れて渡りわづらふ。

旅路の些細な一駒に過ぎないようなことを、何故孝標女はわざわざ日記に書き残したのであろうか。何気なく

記された一節であるけれども、これが他ならぬ、竹芝寺の話に登場していた「瀬田の橋」であったことを思えば、孝標女がこの橋に特別な関心を持っていたことが考えられてくる。

竹芝寺の話では、皇女を連れ出した「竹芝のをのこ」が、境界を越えて逃亡に成功するという印象的な場面[5]で、「瀬田の橋」は登場するのであった[6]。

瀬田の橋を一間ばかり毀ちて、それを飛び越えてこの宮を舁き負ひ奉りて、七日七夜といふに、武蔵国に行き着きにけり。

孝標女は、この話に出てきたために、「瀬田の橋」に特別な関心を払っていたのではなかろうか。「瀬田の橋」は、竹芝寺の話の中でも、他に二度繰り返し言及されていた。

瀬田の橋のもとにこの宮を据ゑ奉りて、

おほやけより使ひ下りて追ふに、瀬田の橋こぼれて、え行きやらず。

話の中での焦点は、「竹芝のをのこ」が「瀬田の橋」を壊したことにあった。孝標女が実際の「瀬田の橋」について抱いた関心も、まさにその点にあったのではないか。

瀬田の橋みな崩れて渡りわづらふ。

瀬田の橋こぼれて、え行きやらず。

二つの文の見事な照応は、孝標女の関心の所在を自らにして語っているようである。竹芝寺の話を聞いて以来、孝標女は「瀬田の橋」のエピソードを実地に当って確めてみたかったのではなかろうか[7]。

もし、竹芝寺の話が本当であれば、「瀬田の橋」は壊れているはずだ。もし「瀬田の橋」が無傷であれば、あ

の話は作りごとであったかも知れない。そういう思いを抱きつつ、孝標女は瀬田川に臨んだのではないか。果して、橋は壊れていた。竹芝寺の話はにわかにその信憑性を高めたに違いない。

孝標女は、「浜名の橋」についても、

浜名の橋、下りし時は黒木を渡したりし、このたびは、跡だに見えねば舟にて渡る。

と記しているが、それと同様、竹芝寺の話の「瀬田の橋」も事実あったこととして振り返られたのではないか。あるいは彼女は、「三河の国八橋」（『伊勢物語』九段）についても、「八橋は名のみして橋のかたもなく、何の見所もなし」と記しているが、これは、逆に孝標女が『伊勢物語』を事実あったことと理解していたことを意味するであろう。

恐らく、孝標女において竹芝寺の話は事実として信じられていた。何よりも、眼の当りに見た「廊の跡の礎」こそが、彼女にとってはその紛れもない証拠であった。竹芝寺の話は、礎石の跡を「いかなる所ぞ」と土地の人に尋ねたところに、その端を発する。眼前にその遺跡が残る以上、かつてそこに「竹芝といふ寺」は実在していたし、その名の寺があった以上、その縁起たる「竹芝のをのこ」をめぐる話も、事実でなければならなかった。

それはちょうど、この話の結文が、一種の起源譚で終わっていることと軌を一にしている。

この家を内裏の如く造りて住ませ奉りける家を、宮など失せ給ひにければ、寺になしたるを、竹芝寺と言ふなり。その宮の産み給へる子どもは、やがて武蔵といふ姓を得てなむありける。

「竹芝」も「武蔵といふ姓」も実在する。それと結びつけられることによって、話の内容も事実であったとされたのである。さらに『更級日記』にはもう一つの起源譚が続いている。

それより後、火焼屋に女は居るなり。

これもまた、話の真実味を裏付けている。当時、火焼屋に女が居たことは、『枕草子』に伝えられている。

御前には、女ぞ出でゝ取りける。思ひかけず、人あらむとも知らぬ火焼屋よりにはかに出でゝ、

（「なほめでたきこと」段）

『更級日記』の竹芝寺の話は、結文に「竹芝寺」「武蔵といふ姓」「火焼屋に女」の三つの起源譚を揃えて話の実在性を強調しているのである。

このような話のあり方にちょうど即応するかたちで、孝標女がこの話を事実として理解していたことは、注目に価しよう。

柳田国男は、この種の起源譚に関して、

日本は古事記風土記の上代から、竹取以降の物語冊子に至るまで、話の段落に「是よりぞ始まりける」を挿んで、特殊の印象を期した例に満ちて居る。それが叙述の眼目でなかつたのは固より、信じて告げ聴いて信ずるのが目的ですらもなかつたのである。近頃この話し方が漸く止んだといふのみで、是は寧ろ説話を古風にする常用の修飾法であつた。其文句がある為に、曾ては尻尾の釣りの様な出来事を、信じた時代でもあつたかの如く推論する者は、余りにも古人を見縊て居る。

（『口承文芸史考』）

と述べているが、少なくとも『更級日記』に徴するかぎり、それら起源譚は、「説話を古風にする常用の修飾法」に留まるものではなく、「信じて告げ聴いて信ずるのが目的」の一つであったと言うべきであろう。

孝標女は、そうした結文にまさに応ずるように、話を「信じた」のであった。孝標女にとっては、竹芝の地で耳にした、この話は、まさしき事実として受けとられたのである。

それは恐らく、この話に先だって記録されたところの、「まのゝてう」の話の場合も同様であったと思われる。

十七日のつとめて立つ。昔、下総の国に、まのゝてうといふ人住みけり。疋布を千むら万むら織らせ、晒させけるが家の跡とて、深き川を舟にて渡る。昔の門の柱のまだ残りたるとて、大きなる柱、川の中に四つ立てり。

道中、たまたまさしかかった「柱」の跡。これを孝標女は、かつての長者の家の跡と信じた。「昔、下総の国に、まのゝてうといふ人住みけり」という、民話の語り出しの常套を踏んだ叙述から推測されるところ、この話ももと恐らく土地の人によって孝標女に語られた伝説の類であったろう。けれども、それは孝標女にとっては事実であった。目の前に残る「柱」、それが何より彼女の目には、長者の栄耀を伝えるよすがと見えたのである。

孝標女がその時聞いた話は、伝説として各地に分布する「長者屋敷」の一つであったと思われる。[8]「長者が普通の農作を以て根拠とせずに、常に一段優等なる生産術、例へば鋳物、染物、製布若くは酒造りの如き職業を撰んだことは事実」（柳田国男『山島民譚集(三)』）であったから、この長者が「疋布を千むら万むら織らせ」て富を得ていたのも不思議はない。「千むら万むら」という言い回しも、「長者屋敷」の話が好んで用いる、富裕の形容であった。「漆千盃朱千盃黄金千両」、「漆万杯朱万杯黄金千両」、「漆千杯朱千杯竹縄千房」などの例が、『山島民譚集』には採集されている。[9]

孝標女が信じた「川の中」の「門の柱」の跡からすれば、あるいはこの話は、水没する長者屋敷の話であった

かも知れない。

長者の栄華窮まり福分尽きて、一朝にして没落したといふ物語は、琵琶でも説経でも何度となく繰返された る、いとやす〳〵とした題目であるにかゝはらず、律儀なる昔の人はその空想のよりどころを求めてゐた。

因幡の湖山の池は、砂が造つたたゞの潟湖であるが、これがあるために湖山の長者は、昔あの岸の丘に住んだことになり、入日を招き返した天罰によつて、数千町の美田がこと〴〵く水の底になつた。（柳田国男『一目小僧の他』）

仮にそれが、朽ち落ちた橋の橋桁に過ぎなかったとしても、「律儀なる昔の人はその空想のよりどころ」を、やはりそこに求めたのではなかろうか。

孝標女も、その例に洩れなかった。

朽ちもせぬこの川柱残らずば昔の跡をいかで知らまし

「朽ちもせぬこの川柱」が眼前に存在している以上、孝標女にとっては、伝説はそのまま事実なのであった。

四

孝標女は、「まのゝてう」の「長者屋敷」の話を、恐らく事実と信じた。しかし、ここで重要なことは、それが、没落の相ではなく繁栄の相において記されている点であろう。「昔の跡」が残る以上、この長者にもいつの日か没落の運命が訪れたはずである。しかし、孝標女はそれには関心を払わず、「疋布を千むら万むら織らせ、晒さ

せける」と、その栄耀に関心を向ける。彼女が、「まの丶てう」の長者についての記事を、わざわざ日記に留めたのは、この長者の富への関心からではなかったろうか。

そう考えるならば、この話に次いで記された、竹芝寺の話にも同様の関心があったことが考えられてくる。この話も、その骨子は一人の貧しい男の致富譚であった。結局のところ、孝標女は、下賤の身でありながらついには「内裏の如」き家に住むに至った、この男の致富の幸運に心魅かれたのではなかろうか。

身分の低い男が、高貴な女性を連れ去るという話なら、この話に類する話は平安朝に限っても少なくはない。例えば『伊勢物語』第六段。この話は「男」が「女のえ得まじかりける」を盗み出すという話。あるいは『伊勢物語』第十二段。この話では、「男」が「人の娘を盗みて、武蔵野へ」逃亡する。『大鏡』ではともに、「后宮」「いまだ世ごもりておはしける時、在中将忍びて率て隠し奉りたりける」と理解されている。

舞台もまさに武蔵野。直前に「紫生ふと聞く野」について言及しているにもかかわらず、孝標女は、こうした『伊勢物語』の話には触れることをしない。『伊勢』の話はきわめて浪漫的ではあるけれど、必ずしも幸福な結末には恵まれないからであろうか。これらに比較するならば、「竹芝のをのこ」の致富栄達が際立ってくる。

あるいは『大和物語』一五五段、安積山の話。この話では、「帝に奉らむとてかしづき給ひける」娘を、「内舎人」が垣間見、恋に落ち、陸奥へ連れ去る。ほぼ同内容の話は『今昔物語集』巻三十に載るが、

姫君何心モ无ク端ニ出テ、妻戸ノ有ル簾ノ内ニ立テ聞ムト為ル、
姫君ヲ掻抱テ飛ブガ如クニシテ、其ノ家ヲ出テ遙ニ去テ、

（大納言娘被取内舎人語第八）

など、『更級日記』

たゞ一人御簾の際に立ち出で給ひて、柱に寄りかゝりて御覧ずるに、

いと香ばしき物を首にひきかけて、飛ぶやうに逃げゝる。

に類似した表現が見出される。しかし、それにもかかわらず、安積山の話では、姫も男も死んでしまうという悲しい結末になっている。竹芝寺の話の幸運とは、較ぶべくもない。

あるいはまた、『俊頼髄脳』などに載る、芹摘の話[10]。この話も、「九重のうちに、朝ぎよめする者の、庭掃きたてる折に、にはかに風の御簾を吹き上げたりけるに」、后を垣間見、叶わぬ恋に苦しむという筋立てになっている[11]。「竹芝のをのこ」が皇女と出会うことになったのも、「御前の庭を掃」いていたとき、皇女は「たゞ一人御簾の際に立ち出で給」うていた。けれども、その後の二人の運命はまったく対照的で、芹摘の男は、恋の重荷に苦しみ、やがて病を得て落命するに至る。

下賤の男の高貴の女性への恋という設定は、非常に好まれた題材であったと思われる[12]が、多くが悲しい結末に終わる中で、独り『更級日記』が、「婚姻の成就と富」とを勝ち得る竹芝寺の話を選んで、一部始終を長々と記し留めていることの意味は、改めて問われるべきであろう。

地方出の、下賤の身でありながら、皇女を得て栄達を果した「竹芝のをのこ」の話は、その栄達の点で孝標女にはよほど印象深かったに相違ない。

よく似た設定の話が、多く恋を主題に据えているのに較べるならば、竹芝寺の話には、意外に恋の要素が乏しいことが、逆に注目される。『伊勢』の話は、いずれも恋の逃避行として描かれているし、後二者の場合も、男

の思いは、それぞれに切実である。それに対して、竹芝寺の話にあっては、二人の恋情すら正面切っては描かれていない。皇女の男への興味は、彼の口にした珍奇な瓢に集中する如くであるし、対する「竹芝のをのこ」の逃走も、皇女の願いに従ったまでのことのようでさえある。

ここに、竹芝寺の話に対する孝標女の関心が奈辺にあったか、すでに明らかであろう。

昔話の多くは婚姻譚である。しかし、恋愛はほとんど語らない。生活の安定を目標にした婚姻であり、恋の冒険も愛の奉仕も語らない。婚姻は同時に物質の充足を意味する。（中略）幸福な結婚を達成することは、同時に主人公の社会的な身分の上昇を意味する。男は長者の娘をめとることによって、自分もまた長者になる。（中略）婚姻の目的は、あらゆる時代、あらゆる民族において後継者をつくることであろう。昔話では、結婚するということは子供をもうけ、富をえて安定した生活をすることであった。（『民話』）

いわゆる、物語的なロマンティシズムとは様相を異にして、孝標女の興味は、多くの昔話と同じく、致富、栄達、一家繁盛にあったようである。[13]

話自体は、『伊勢』や『大和』などの物語のように、いつでも劇的に、あるいは浪漫的に展開し得る可能性を潜在させていた。あるいは、この話が、竹芝寺の草創について触れることからすれば、この話は、後世の本地物、縁起譚の如き仏教説話として語らる可能性さえあったはずである。しかし現に『更級日記』に書き留められた竹芝寺の話はそのいずれでもなく、「竹芝のをのこ」の成功を語る話に収斂している。

実際のところ、孝標女にこの話がどう語られたかは、今となっては知る術もない。しかし、この話が『更級日記』の一節として書かれるに当っては、作者孝標女の一定の関心に従った、選択と改変、整理があったものと考

えなければならないだろう。

すでに述べた如く、『更級日記』の竹芝寺の話の文章は、「出来事の終点にカメラを固定して、望遠レンズを用いて起点までを見通し」たような特徴を備えるものであった。その「出来事の終点」とは、この場合主人公の致富、幸福なる結末であったことは疑いない。「論なく」、「さるべきにやありけむ」などの語も物語を結末へと展開させるべきものとして多用されたのではなかろうか。

孝標女は、この話を徹頭徹尾、致富栄達の話として受け止めたのであった。末尾には、「武蔵の国を預け取らせて」、「その国を預け奉らせ給ふよしの宣旨」という繰り返しが見られる。このことが、結局のところ、孝標女が目ざしたこの話の結末であったのであろう。

竹芝寺の話についての孝標女の最終的な関心が、「その国を預け奉らせ給ふよしの宣旨」にあったとするならば、このことはすなわち、『更級日記』にもう一つ記された在地の語り、富士川についての話に対する孝標女の関心をも容易に説明することになろう。

孝標女は、富士川近くで聞いた「国の人」の語りを記すのに、やはりその日記の紙幅を些かならず費している。

富士川の「川上の方より黄なる物」が流れて来た。取り上げて見ると、「黄なる紙に丹して濃く麗はしく」文字が書かれていた。「あやしくて見れば、来年なるべき国どもを、除目の如みな書きて、この国来年空くべきにも、守なして、また添へて二人をなしたり」。不思議に思っていたが、翌年の国司の補任は、その通りであった。その国司は、三月と立たぬうちに死んだが、次の国司も書き添えられていた人だった。翌年の司召は、今年富士山に多くの神々が集まって決めていられるのだと思った。

まさに話の主題そのものが、「その国を預け奉らせ給ふよしの宣旨」をめぐるものである。[14]

平安朝の中下級の貴族達が、いかに国司任官を望み、猟官に腐心したか、『枕草子』に「来年の国々、手を折りてうちかぞへなどして」（「すさまじきもの」段）とある通りであった。[15] 孝標家とてその例外ではなかった。孝標女十八歳の記事には、「一月の司召に親のよろこびすべきことありしにかひなき」とある。まして、これが上総介の任解けての帰京の途上であってみれば、孝標女にとっては無関心ではいられなかったはずである。[16]

『更級日記』前半の上京の記には、孝標女が旅先で聞いた三つの話が書き止められている。一見それは偶然の所産であるように見えるけれども、しかし、そこには一貫して、孝標女の致富、栄達への関心が窺われるのである。しかも、それらは孝標女にとっては、架空の物語ではなかった。それらは、この世に、致富、栄達ということがまさにあり得ることを示す、貴重な実例であったのである。

五

『更級日記』に徴する限り、少なくとも孝標女にとっては、説話は事実として信じられていた。あたかも例えば、報告や噂話のように。しかして、それはその信じられた姿において、日記に記し留められたのである。

説話ばかりではない。幼ない頃の孝標女の耳に届けられた、いくつかの物語をめぐる話、それらもまた彼女にとっては、同様の意味を持つものであったに違いない。

世の中に物語といふものゝあんなるを、いかで見ばやと思ひつゝ、つれ〴〵なる昼間、宵居などに、姉、継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、所々語るを聞くに、いとゞゆかしさまされど、我が思ふまゝに諳にいかでか覚え語らむ、いみじく心もとなきまゝに（中略）「京にとく上げ給ひて、物語の多く候ふなる、ある限り見せ給へ」と身を捨てゝ額をつき祈り申す

書物を介さず直接、孝標女に語りかけられた物語、そのどこに説話との径庭が認められよう。後年、実際に物語を手にしてなお、物語を「あらましごと」と信じていたと告白するように、耳から伝えられる説話も、文字で読まれる物語も、彼女にとってはそれは、現実として理解されたのである。

実際に経験する現実と、二次的な見聞による物語、説話の類とは、孝標女にとってはそのまま連続する現象なのであった。いずれも事実として受け取られた。現実と物語との境界など、曖昧なものに過ぎなかった。

実際、幼ない頃の孝標女は、現実とも物語ともつかない世界に生きていた。物語は「あらましごと」であったし、逆に現実は物語のように展開することが期待されさえしたのである。

「源氏の物語」以下の物語、あるいは「長恨歌といふ文」の物語に親しんでいた頃、姉と二人、七月十三夜の月を眺めて、夜を更かすことがあった。折ふし、隣家へ訪れる車があって、「荻の葉〴〵」と呼ばう。けれども女の反応は無く、車の主は「笛をいとをかしく吹きすまして」帰って行ってしまった。これに対して孝標女は、

笛の音のたゞ秋風と聞こゆるになど荻の葉のそよと答へぬ

と不満の声を挙げた。姉も、

荻の葉の答ふるまでも吹き寄らでたゞに過ぎぬる笛の音ぞ憂き

とそれに和した。

詠じられるところは、事が期待通りに展開しなかったことへの不満なのであるが、その期待とは恐らく、事態の恋物語的な展開であったろう。

例えば『源氏物語』帚木の巻には、「神無月のころほひ、月おもしろかりし夜」、女の家を訪う男の姿が描かれている。

この男いたくすゞろきて、門近き廊の簀子だつものに尻かけて、とばかり月を見る。（中略）懐なりける笛取り出でゝ吹きならし、蔭もよし、などつゞしり歌ふほどに、よく鳴る和琴を調べとゝのへたりける、麗しく掻き合はせたりしほど、けしうはあらずかし。

男の笛の音に答えるに、女は和琴をもってした。以下、話は和歌の贈答へと展開してゆくが、孝標女たちの期待したのは、このような優雅な恋物語がそこに繰りひろげられることではなかったろうか。

特に、姉の詠じた歌は、『源氏』の、

木枯しに吹き合はすめる笛の音をひきとゞむべきことの葉ぞなき

という女の歌に通うところがある。

この夜、孝標女姉妹は月を眺めて時を過ごし、すでにロマンティックな気分に浸っていた。

その十三日の夜、月いみじくくまなく明かきに、みな人も寝たる夜中ばかりに縁に出でゐて、姉なる人、空をつくゞとながめて、「たゞ今、ゆくへなく飛び失せなば、いかゞ思ふべき」と問ふに、なま恐ろしと思へる気色を見て、異ごとに言ひなして笑ひなどして聞けば、

明月に姉は何を思ったか、「ゆくへなく飛び失せ」ることを想う。『竹取物語』のかぐや姫を想ったか、あるいは『源氏』の夕顔を想ったか。かぐや姫は、八月十五日明月の夜に月に帰って行ったし、『源氏物語』の夕顔は、十五夜の月を見て、「いさよふ月に、ゆくりなくあくがれむことを」「思ひやすらひ」つつ、結局落命昇天する。

いずれにしても、この時姉妹は、非常にロマンティックな心情を共にしていた。そこへ訪れた牛車に笛の音、その想像力が刺激されたのは、当然のことであった。あたかも夢見る如く、二人は隣家の現実に恋物語の展開を重ねたのである。

詠じられた二首の歌は、一篇の物語を素材とした詠歌のようになった。それはこの六日前、七夕の夜に詠まれた「長恨歌といふ文」の物語に取材した歌や、姉の死後、「かばね尋ぬる宮といふ物語」をもとにして詠まれた歌、

埋もれぬかばねを何に尋ねけむ苔の下には身こそなりけれ

のような、あたかも物語と現実とが連続するものであるかのような把握に基づいた歌と、その発想の基盤を等しくするものであろう。

現実は、物語によって解釈されたし、しばしば物語のように展開することを期待されたのである。孝標女にとって、物語も現実も大差はなかった。『更級日記』上洛の記の部分に託された各地の伝説も例外ではない。致富、栄達を語る物語は、現実もそう展開することを期待されて、孝標女の記憶に留められ『更級日記』に書き残されたのである。説話が事実として信じられた実例を、ここに見ることが出来る。

六

明治維新の曙光もまだ仄めき初めぬ頃、東濃の山里に生れた自分（わたくし）は、旦暮皚々たる御嶽（ニホンアルプス）の積雪を望み、模糊たる恵那山の雲霧を眺めて、単調な生活をして居たのであるが、幼年時代から深く和歌に趣味を有つて居た為に、勢ひ古文学に引きつけられて、「女の癖に」と叱られつゝも家の蔵書は何くれとなく、手当り次第に読過したけれども、何分自分の家は三代続きの漢学者であつたので、漢籍は可なり蔵されてあつたが、国書は余り沢山も無かつた。其故何時とは無しに聞き覚えて居た源氏物語の名称に憧憬れ、早く読んで見たい〳〵と熱望して居たにも関らず、たゞの一巻も眼に触れた事が無かつたのである。（中略）

其の後作歌の手引して戴いた某老尼の机上に、偶ま湖月抄の載せてあるのを見て又懇々とその借読を願つたが、やはり聞かれなかつたけれども、余りの熱望を気の毒に思はれたか、漸く同所のところ〴〵を抜いて、時々説いて聴かされたのが、どんなに面白く嬉しく感じた事であらう。凡てが貧弱な蕞爾たる山間の小天地に於いて、絢爛な平安朝の盛時、宮廷貴族の豪華な状を脳裡に画いて、眼底に浮ぶ蜃気楼に、如何程胸を躍らせた事であつたらう。

こんなに憧憬れた源氏物語の幻影を追ひつゝ上京した当時、和歌の師や国学の大家に就いて同書の事を尋ねると、孰れも異口同音に、是非熟読し質疑もせよと勧められ、漸く父の許しも出て、先づ湖月抄を与へられたのである。

（『源氏物語講義』緒言）

『更級日記』から八五〇年の後、「東路の道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出で」た孝標女のように、僻遠の地に生まれ、『源氏物語』にあこがれて育った少女がいた。やはり漢学の家の出で、やがて宮中に出仕することになる、後の下田歌子である。

遠く時代を隔てながら、『源氏物語』への渇仰の様は瓜二つの様相を呈している。[17] けれども、ひとたび上京を果たし、実際『源氏物語』を手にしてからの反応は、まったく対照的に異なっていた。

が、同書の全篇を通読して、漠然ながら大凡其の梗概を知るに及んで、自分は何故か淡い失望に似た、何となく満たされぬ様な気分が、同書の上に漂ふのを、どうする事も出来なかつた。と同時に著者紫式部に対する、過去の極端なる崇拝熱も稍薄らいで、一種の疑惑を感じた。其は後になつて殆ど諒解し、会得した様に思はれるのであるが、そは全く余りに窮屈な、殆ど不自然な程厳格であつた自分の家庭の空気中に育てられた結果、濃厚なる恋愛問題に対する一種の嫌悪とか、侮蔑とかいつた様な心持が、知らず〳〵そんな風になつて居たのであらう。即ち先入主色となつたものと思はれるのである。

同じ憧憬と言っても、すでに『源氏物語』は「和歌の師」や「国学の大家」が称揚する古典になっていた。時代も違えば、読む側の意識も変わっていた。孝標女の如き、虚実の堺を紛らわせたような両手を挙げた耽読など、最早されようはずもなかった。

世変り時移って、何らかの「先入主色」なしに物語に対することなど不可能になってしまった。物語を、ある

いは説話を無邪気に信じられた幼なき日は、すでに遠い昔になったのである。

注

(1) 「なりひさごといふものを、人の得させければ、ある時木の枝に掛けたりければ風に吹かれてなりけるを」(『徒然草』一八段)。
なお、瓢箪については、網野善彦・大西廣・佐竹昭広『瓜と龍蛇』に詳しい。

(2) あるいは、酒造りにかかわる歌謡であったか。

(3) 民話の世界では、瓢箪は財宝をもたらしてくれるものであったが、「宝瓠」などと呼ばれる一類の話には、「おひょうらんこひょうらんこ」(佐佐木喜善『老媼夜譚』五八「瓢箪の光物」)云々の「呪文」めいた「韻文」が唱えられるものがある。

(4) 富山県に伝わる「餅の白鳥」という話には、「七つ蔵には八十人槽の大酒槽をふせ、山吹色の酒を海にたとえ」、「宴は七日七晩つづき」、「長者屋敷では、七日七晩、鏡餅をついた」などという表現が用いられている(松谷みよ子他『日本の民話5　長者への夢』)。

(5) 『伊勢物語』六段「芥川といふ川を率て行きければ」も、川沿いを行くのではなく、川を渡ったと解釈すべきであろう。

(6) 『日本書紀』によく似た話が載る。「男依等到瀬田。時大友皇子及群臣等、共営於橋西、而大成レ陣。(中略)仍切断橋中、須容三丈、置二長板。設有蹋レ板度者、乃引レ板将レ堕。是以、不レ得進襲。於レ是、有勇敢士。曰大分君稚臣。則棄長矛、以重環甲、抜レ刀急蹈レ板度レ之。便断著レ板綱、以被レ矢入レ陣。衆悉乱而散走之。不レ可レ禁」(天武元年七月二十二日)。竹芝寺の話の淵源の一であったかも知れない。

(7) 後世、飛鳥井雅有も同様の関心を「瀬田の橋」に払っている。
瀬田の橋、かちにてぞ渡る。更級の日記には、昔帝の御娘を盗みて東へ逃げ下る者の、追はれじとてこの橋をひきたりけりとなん。今は、何のためならねど朽ちぬる。なかば、絶え間がちなり。(『春のみやまぢ』)

(8) 「千万の倉を持つためにつけられた「まんの長者」の話も（中略）、見逃せない長者伝説である（津本信博『更級日記の研究』）。

(9) 『河海抄』の引く歌謡に「西京なる御達は綾千疋縑千疋繰り上げて織るかとしの引きするや布引きなすや」という詞章がある。

(10) 『俊頼髄脳』は、この説話に関して、

芹摘みし昔の人も我がごとや心にもの、叶はざりけむ

の歌を挙げるが、この歌は『更級日記』の、

幾千度水の田芹を摘みしかば思ひしことのつゆも叶はぬ

の本歌であると考えられている。

(11) 御簾のもとに立った高貴の女性を垣間見て恋に落ちるというのは、物語の好んだ類型であったらしい。『源氏物語』若菜上で柏木は、「御簾のそばいとあらはに引き上げられたるを、とみに引き直す人もなし。（中略）几帳の際少し入りたるほどに、袿姿にて立ち給へる人あり」という状況で女三宮を垣間見る。これを承けて、『木幡の時雨』には、「縁の方に立ち出で、柱に寄り添ひて眺め出したる、かの女三宮の立姿、柏木衛門督身をいたづらになしけるも、かくばかりにや、いとことわりと御覧ず」とある。

他に、「いつぞや御前に参りし御局の簾中より見出されたる上臈の御立姿を一目見しより、恋の病ひとなり」（『俵藤太物語』）、「ある時御庭の菊の下葉を取るとて、御簾の隙より、かたじけなくも女御の姿を見奉り、静心なき恋となり」（『恋重荷』和泉流・間狂言）など。

(12) その中には、『大智度論』や『経律異相』などに載る、術婆迦説話に淵源を持つものがあろう。

(13) 孝標女のロマンティシズムの底に、世俗的な願望があったであろうことは、前稿に指摘した（「菅原孝標女と源氏物語」『成城国文学論集』第二十二輯）。

(14) この話の素材のいくつかは民話に類型的なものである。「この川上の未知数といふことは、山の多い日本の島では今でも考へられることだと見えて、藁が流れて来たので谷の奥に里あるを知り、木の椀を拾ひ上げて落人の隠れ家を尋ねあてたといふ類の趣向は、くりかへして後代の小説にも思ひ浮かべられて居る（柳田国男『桃太郎の誕生』）」。

また、群神の評定については、「俗説弁云、近世の諺に語り侍るは、十月出雲の大社に諸神集りて、男女の縁を結玉ふと」（『吉田東伍『大日本地名辞書』）などの類例が指摘出来る。

(15) 『枕草子』は、「除目にその年の一の国得たる人」を、「したり顔なるもの」の一として挙げる（「したり顔なるもの」段）。

(16) 陸奥守平維叙は、任地で、衰微していた神を見つけ、手厚く祀って帰京したが、陸奥国の庁官の夢に、その報恩のために神は維叙を「常陸守」にしたと告げた。果して、「京ヨリ除目ノ書ヲ持下タリ。見レバ、此ノ国ノ前司、既ニ常陸ノ守ニ成ニケリ」（『今昔物語集』巻第十九、陸奥国神報守平維叙恩語第卅二）。徐目に関する関心が当時いかに高かったか、端的に示す説話の一つである。

(17) 同書「源氏物語に関する評論、註釈の種類」の項に、「更級日記の著者菅原孝標の女をして、源氏物語に非常の礼讃憧憬を感ぜしめた状況は、即ち同日記の中にも顕はれて居る」とあるから、歌子は『更級日記』を読んでいたものと思われる。